

梅雨の効用

校長 田中 準三

先月の18日(土)から22日(水)まで、5年生が4泊5日の自然学校を実施し、私も全日程を子どもたちと過ごしました。初めて親元を離れ、しかも5日間の長期にわたってクラスメイトと過ごす経験は子どもたちに価値あるものとなりました。出発日の交通事情による遅れや、2日目の雨などがありましたが、プログラムの差し替えなどで対応し、ほとんどすべてのスケジュールをやり遂げることができました。今年度のスローガンは「ひとつ」でしたが、いろいろな場面で子どもたちひとりひとりがそれを意識し、素敵な一体感を醸し出していました。この4泊5日は子どもたちの成長に大きく貢献したものと確信しています。

今年は思いのほか梅雨入りが早く、平年に比べ10日(昨年より11日)も前の先月28日に入梅しました。我が国では北海道を除いて梅雨は避けて通れない気象現象です。この時期は雨が多いのはもちろんのこと、湿度が高くじめじめした毎日が続きます。カビが発生したり、食品の傷みが早かったりするのもこの時期で、不快指数がことのほか高まります。梅雨についてはこのようにあまりいいイメージはありませんが、実はこの梅雨は1年のサイクルの中でとても重要で、我々の生活上なくてはならない気象現象でもあるのです。あるお天気キャスターの話では、梅雨は多くの雨を降らせ、田畑や植物を潤すだけでなく、雲が日光を遮ることによって気温の上昇を抑えたり、年間で最も強くなる紫外線が私たちの肌に当たるのを防いでくれる役目を果たしているそうです。もし、梅雨がなければ今以上に不快な状態になるのだそうです。

「五月雨を あつめて早し 最上川」

これは松尾芭蕉のあまりにも有名な句ですが、季語は五月雨(さみだれ)です。一見5月ごろのように感じますが、芭蕉の生存した時期はまだ旧暦の時代であり、今でいう「梅雨の雨」に相当します。この句は降り続く梅雨の雨を集めた最上川が水かさを増しながらゴーゴーと勢いよく流れていく様子を詠んだもので、自然への畏敬の念を表したものです。自然との共生、自然といかにうまく付き合っていくかが人間の知恵だと思います。

雨が空けると夏本番ですが、梅雨は春と夏とをつなぐ接着剤のような働きをしていると言えるかもしれません。ただ、体調を崩しやすいのもこの時期です。お子様の健康管理にはくれぐれもご注意ください。